

2017 年度酪農学園大学野生動物医学センターにおける 日本野生動物医学会主催 SSC (Student Seminar Course) の実施報告

川久保和希 (酪農学園大学獣医学群獣医学類 2 年 / 日本野生動物医学会学生会酪農学園大学支部ルウエ)

浅川満彦 (酪農学園大学獣医学群獣医保健看護学類 / 日本野生動物医学会 SSC 実行委員会)

背景とこれまでの概要について

酪農学園大学にて開催される SSC は、2004 年 4 月に酪農学園大学動物病院 (現・動物医療センター) 構内に大学院獣医学研究科の付帯施設として野生動物医学センター Wild Animal Medical Center (以下、WAMC) が設置されたのを機に開始された。WAMC では野生動物医学の研究・教育および啓発に関する様々な活動が展開されている (注: 最新内容は Facebook® で随時、紹介。この Facebook® へのアクセス方法はまず、Mitsuhiko Asakawa で google 等のエンジンで検索、トップに Facebook® が表示、選択)。

この SSC は設立年度から前年度まで計 12 回が実施され (2010 年度は FMD 対策のため中止)、34 名の方が参加された (所属大学は北から北海道大学、帯広畜産大学、北里大学、日本大学、東京大学、麻布大学、日本獣医生命科学大学、帝京科学大学、岐阜大学、鳥取大学、宮崎大学、および鹿児島大学、学科系統別内訳として獣医 26、看護含応用動物 8)。そして、今回 (2017 年 9 月 8 日から 11 日) で、13 回目の開催となった。

後で述べられるように、当該 SSC における教育内容は浅川と WAMC を拠点とするゼミ生が担当するが、日本野生動物医学会学生会酪農学園大学支部ルウエに所属する有志の生活面での協力が不可欠である。この団体は、2000 年、同部会創立を機に設立され、現在、本学では未公認学生サークルではあるが、活発に活動をしている (注: ルウエとはアイヌ語で「足跡」を意味する)。この活動をより活性化することを祈願し、SSC 報告もルウエの SSC 担当代表にお任せすることにした。会員諸兄におかれては、今後も、本学における SSC をご支援頂ければ幸いである。

なお、今回の参加者、山藤さんが Royal Vet Coll/Zool Soc London 共同開講による専門職大学院 MSc Wild Animal Health 課程に興味をお持ちであることが判ったので、本 SSC に参加された間に、ロンドン動物園のスタッフに連絡を取り、面談の調整をさせて頂いた。実際、この SSC を終えた数日後、同園スタッフから山藤さんとの面談を無事終えたとの連絡をもらったことを追記する。
(文責: 浅川)

WAMC における第 13 回 SSC の実施報告

以下は本 SSC 担当の浅川教授に代わり、部会支部として SSC をサポートさせて頂いた有志代表として川久保が報告をする。今回の SSC に参加下さった方は、以下 1 名 (WAMC・SSC の 35 番目) で SSC 参加報告書は本拙稿末尾に掲載をした。なお、紹介する方々の氏名敬称は略させて頂く。

東京大学獣医学専修 4 年 山藤あかり (女性)

また、今回は特別にマレーシア国サバ大学生物学部生 5 名 (合宿所を共用させて頂いたことを契機に) も研修の一部にご参加頂き、本 SSC の国際化について検討をする機会とした。研修担当者は例年のように浅川満彦教授 (本学獣医学群) が座学を、WAMC 所属の学部 4 および 5 年のゼミ生 (注: 浅川ゼミでは研究室演習の一環として全員参加が義務) が実習を、それぞれ担当をした。

ゼミ生の氏名を示す。

4 年 大橋超実、谷口 萌、内匠夏奈子

5 年 近本翔太、佐々木 梢、長濱理生子

また、例年通り学生会本学支部のメンバーで、参加者への生活面支援を担当した。

1 年 下岡 誠、菅原紗彩、林 美穂

2 年 川久保和希 (SSC 担当代表)、福元風夏

3 年 小亀 舜

4 年 松根和輝

この他、センサス実習では、野幌森林公園をフィールドに野鳥研究をされる本学大学院酪農学研究科修士課程 (1 年)・高橋飛鳥 院生にご指導頂いた。なお、高橋院生の指導教員・金子正美教授 (本学循環農学群) には前述のサバ大生参加についてご許可頂いた。

本件は日本野生動物医学会 (2003) で提示された「望ましい実習項目」の「基本コース」および「応用コース (Ⅲ)」の一部を基盤に、野外疫学 field epidemiology の視点を涵養することを目的とするもので、この関連分野の講義、剖検あるいは麻酔用吹き矢の作製と使用法の実習、WAMC に隣接する野幌森林公園



写真1 第1日目の研修（左：クジラ類解体用大刀を持つ参加者，上：酪農大農場にてシカ食害実見）



写真2 合宿所における食事風景（左：食事の様子，右：ルウエメンバーによる調理）

森林地帯内の野外実習（センサスと捕獲）などが組み込まれている。開催年によっては WAMC 入院中の傷病野生鳥獣の飼育や保定・採血（注：WAMC は北海道庁・北海道獣医師会指定野生傷病鳥獣受診動物病院も兼任），あるいは有害捕獲されたアライグマなどの処置などもあったが，今回はこのような飛び込み依頼はなかったもの大変充実した内容であった。時系列に沿っての研

修内容のトピック的な事項はスナップ写真とその説明文を記載し今回の事業報告としたい。最後に一言。このコースを修了された方の中には，各園館や野生動物などのプロとして活躍される方々も散見されている。我々学生でこれらに近い進路を検討している者にとっては，野生動物医学を専門的に学べる貴重な機会であると思う。
（文責：川久保）



写真3 野幌森林公園ナイトハイク（左）と座学一コマ（右：器八木式アンテナを持つ参加者）



写真4 野外調査風景（左），WAMC 入院室での実習風景（中央：大学内の演習林に生息していたアカネズミの観察，右：剖検実習）

SSC 参加レポート

山藤あかり（東京大学獣医学専修）

私は昔から野生動物の保全に関わる仕事をしたいと思っていて獣医学部に進学したが、自分の現状からどのように夢にアプローチしていけばいいのかがはっきり分かっていなかった。なので、大学生で自分の時間がたくさん取れる間に、自分から積極的にたくさんの経験を求めて、野生動物と関わっている人たちに話を聞こうと決めて、今回のSSC参加を決めた。4日間はフィールドワークや解剖などの実習と浅川先生の講義の、大きくわけて2つの部で構成されていた。どちらも今の私に必要で、大変有意義なもの

となった。

実習では、森に入って鳥類ラインセンサス法を学んだり、シャーマントラップを設置して森の野生動物を捕まえたりした。これらの経験は私の大学がある東京では中々経験できないことで、野生動物の調査はこのように行われるのか、と初めて実感できた。特に設置したトラップに野ネズミが捕まっていたときは感動を覚えた。フィールドワークの他にも、アライグマの解剖や、野鳥の死体のサンプリングなどを体験したが、これらも大学ではできなかった体験でたいへん貴重なものだった。私が実習で最も印象に残っているのは、自分で解剖した野生動物の腸管を調べ、条虫や線虫が見つかったことだ。今まで大学で経験した実習では、最初



写真5 懇親会（左）と閉会式（右）

から寄生虫を与えられて観察したりすることはあったが、今回のように、全課程を自分で追えたことはなかったため面白かった。しかも、野生動物を研究の対象にしている人はこのように調査しているのか、と分かってとても勉強になった。

講義の面でもとても充実していた。今までも野生動物の現状についてネットで調べたりすることはあったが、やはり専門としている先生の話の直接聞くことができるのは全然違うと感じた。日本のネズミ類についての生物地理学や、傷病鳥獣の救護の現状、海外の獣医大学の話、と多岐にわたったが、どれも聞いたことのない話ばかりで大変勉強になった。今まで「怪我や病気の野生動物を保護・治療して、リハビリを終えて野に還すなんて、すばら

しい」と思っていた救護活動についても、救護個体のもたらす問題などの話を聞き、自分の知識の浅はかさを知った。

まだまだ野生動物医療の分野に対して自分は知らないことが多すぎることを痛感したが、今回の SSC 参加により野生動物の保全の難しさや奥深さを知ることができた。また、同じ志を持つ多くの同世代の学生に会うことができた。浅川先生とも進路や海外の大学の話がたくさんできてとても勉強になった。浅川先生をはじめ、生活面のサポートをくださったルウェの方々、実習でたくさん教えてくださったゼミ生の方々の協力なしでは私はこんなに有意義な4日間を過ごせることはなかった。この場を借りて御礼申し上げる。